

日本振袖始

享保三年二月上演（作者六十六歳）

素盞鳴尊を巡る神代劇—振袖創案、歌道開発と素尊

木谷蓬吟

〈出典：『近松の天皇劇』淡清堂出版、昭和22年12月〉

序の詞を見ると。

天照太神に奉る、四月九日の神御衣は和妙の御衣、広さ一尺五寸、荒妙の御衣一尺一寸、たけ各四丈、御髻糸頂玉手玉足玉の緒の繰返し、神代の遺風末の世に、恵みをおほふ秋津民、千草振袖広矛の国平げくしろしめす、天照太神の御孫、天津彦火瓊々杵尊と申すこと、代々に王たる始めなれ

とあるが、本作は珍しくも神代の朝を世界とし、素盞鳴尊を主人公として、厄神三熊の大人の討伐、出雲八岐の大蛇退治、蘇民将来兄弟の事蹟をまじえ、そのお守札の由来、七五三縄の起源、日本和歌の濫觴などを叙し、若い女性の服制である脇明けの根元を劇化し、外題の振袖始の解説もある。登場人物は、古代の神人や、厄神などで、異った雰囲気をかもし出してはいるが、作品としては平凡。ここにはその各段の梗概を約言するに止めて置く。

第一段……宮中、天皇出御、三熊の大人と云う厄神の出現、素盞鳴尊の勇猛、岩長姫の怪異を描く多色多彩。それに瓊々杵尊と木花開耶姫との恋愛物語が挿まれ「互にニコニコににぎの尊」など述べている。

第二段……素尊の厄神三熊退治に、鬼の手形の怪奇滑稽。四百四病担当の四百四鬼の登場などに一笑させ、天兒屋根命の正義を示す七五三縄の来由、それに暴勇素尊に悔悟の動機を与えた、忠烈稲彦の死などが光っている。

第三段……厄除けの神符として著名な「蘇民将来子孫の宿」の来歴と伝説を基として脚色し、兄の巨旦将来を貪欲強悪の男とし、弟の蘇民将来を温厚誠実の人として、流浪の素尊に対する環境の色彩を複雑化している。

第四段……「素盞鳴尊道行」に始まり、出雲国簸の川上で、素尊は手摩乳長者の娘稲田姫と逢い、折しも飛んで来た鶺鴒を縁に、愛情が結び交わされる。稲田姫が俄に大熱のため苦しむ、尊はこの熱病を助けんと、劍を構えて発言した。

そもそも此日本は日の神の御国にて、陽気盛んにして暖かなること、天地のうちに並ぶかたなき国土……日本に生るる者は、十六の夏までは両袖の下を、鬩腋の脇明けにして熱を洩らし、涼しみを受けざれば、国と人と相応せず……今より日本の貴賤男女、我が詞を式となし、脇明けを着せさせば、見よ見よ無病延命疑ひあるべからず尊は劍を抜き放って、綴じ詰めた左右の袖下を断ち切って脇を明けると、煙り立ち昇って熱気は去り、姫は回復する。更にまた尊は、姫の人身御供の厄難から救うことを叙し

ている。

第五段……大蛇退治の場は、舞踊劇としても価値があり、後世に長く伝えられ生命を保っている。始め「八雲猩々」の景事から起って、八岐の大蛇が現れ、八つの甕に湛えた毒酒の香に魅せられて、奔放自在に乱舞する、優麗稲田姫の勇敢、大蛇の腹中に呑まれて十握の宝剣で裂き破り現れ出る。尊は、勇猛力を奮って大蛇を寸々に切り伏せて退治する。そこへ、天児屋根命を先として日月の御旗を翻して多数の軍勢が出場する。

……御迎ひの諸軍勢、野に満ち山に敷島の、歌に和ぐ君が代は、八島の外の国までも、日本の威を振袖の、人民無病延命に五穀は家に満ちにける

これで目出度く幕を閉じるが、この末文にある「敷島の歌に和ぐ」というのは、稲田姫の母が姫を御宮仕えにと勧めた時、尊の詠まれた歌のことを云うので、「八雲立つ出雲八重垣妻籠に八重垣つくるその八重垣を」これは三十一文字和歌の始めであるとの通説になっているが、かくて素尊は、强悍一向の英傑とばかりではなく、振袖の創始者、歌道の祖として、まさに文武兼備の俊髦に彩飾されている。